（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　菱川　邦俊

本論文は，現代ブルガリア語の文法カテゴリーに関する概括的な記述と，中でも特に「相」（ヴォイス）のカテゴリーの形態と意味についての厳密な規定を目的とする。

ここでいう「現代ブルガリア語」とは，10～11 世紀の「古ブルガリア語」（いわゆる「古教会スラヴ語」にほぼ等しい），12～15 世紀の「中期ブルガリア語」，18 世紀末～19 世紀後半までの「新ブルガリア語」の後，18 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，ロシア語の圧倒的影響下に規範が確立し，現代に至っているブルガリアの文章語を指す。研究範囲および研究方法の確定に充てられた序章に続き，第 1 章では主にブルガリア語の「法」（ムード）のカテゴリーが取り上げられ，「直説法」「第二直説法」のそれぞれ 9 つの時制（第二直説法にあってはさらに各時制の 3 つの形態），「命令法」「仮定法」のそれぞれの形態とその用法・意味が包括的に記述される一方，巻末の参考資料にその全形態と 5 種類の分詞の形態が示されている。

続く第 2 章は学説史の記述に充てられている。現代ブルガリア語の確立期である 19 世紀から現代にいたる主要な文法的著作について，「相」のカテゴリーの形態と意味の定義が比較対照され，能動と受動の 2 つの相が認められるにいたる過程が示され，同時にいわゆる「アカデミー文法」の記述の曖昧さが批判される。また「体」（アスペクト）のカテゴリーについても，主として「アカデミー文法」の語形成の記述を中心に検討が行われ，「完了化」「不完了化」のプロセスにおけるロシア語との相違点が浮き彫りにされる。

第 3 章では形態論的見地から受動相の 2 つの形態が分析記述される。特に，従来の文法書で ce (se)を伴う形との区別が不明瞭だった си (si)を伴う形について，受動相とは無関係とする判断が示されている。また，非他動詞由来の「受動」過去分詞と不完了体他動詞由来の受動過去分詞の意味と用法を，完了体他動詞由来のそれと比較し，その異同についての考察が試みられている。

第 4 章では現代作家ヴェジノフの中編小説（1976）のテクストによって，個々の ce (se) 動詞の用例の分析と，非他動詞および不完了体他動詞由来の受動過去分詞の，受動相との関わりの検証が試みられ，一定の成果が示されている。

本論文の中心テーマである「相」の問題は，現代ブルガリア語における名詞類の格変化の欠如と複雑な動詞変化組織という，スラヴ諸語の中でも際だった特異性に起因する困難さをはらむ。審査においては，本論文で取られた共時的，形態論的アプローチに加え，通時的，統語論的アプローチやロシア語以外のスラヴ諸語との対照・比較の必要性が指摘された。そのような課題は残すものの，このような大問題に取り組み，権威ある「アカデミー文法」の不備を一定程度正した功績は審査委員会が一致して認めるところであった。

以上により，本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位授与に値するものとの結論に達した。